　マヤの通夜はしめやかに執り行われました。とは残念ながらならなかった。おばさん、マヤのお母さんがぶっ倒れたからだ。

「あああああああああああああああ」

　ガラスか陶器を派手に床にぶちまけたみたいな金切り声だった。あああとしか聞こえなかったけど、マヤの名前を呼んだのかもしれない。お坊さんがお経をあげている最中に突然叫び出したおばさんは、壇脇の親族席から飛び出すと、その勢いのまま献花台とお坊さんをなぎ倒してマヤが収まっている棺まで突進。頭突きでもするかのような体勢で棺に抱きついて、そのまま力尽きた。失神したらしい。娘が街中のコンクリートで頭をかち割って死んだとなれば、こうなるのも仕方ないかなと思って、私はそれを静観していた。

　会場は一時騒然としたけど、おばさんとは対照的に妙な落ち着きを払ったおじさんのアナウンスで一般参列者は退場することになった。出口ではマヤのお姉さんとおばあさんが「せっかく足を運んでくださったのに、申し訳ありません」と、退場していく人たち（仲良くもなかった同級生たちがそこそこ来てたから結構な人数だ）の一人一人に、泣き腫らした目で頭を下げていた。こんなときに、申し訳もなにもないだろうに。

　式場の建物を出てすぐに、マヤの遺影をもう少しよく見てから出てくればよかったと後悔した。高校生活の二年強を一緒に過ごしたのに、たぶん私はマヤの写真を一枚も持っていない。あの遺影は、マヤの顔を見られる人生で最後の機会になるかもしれなかった。

　名残惜しさに出口のほうを振り向くと、金田と藤本がちょうど出てくるところだった。藤本はハンカチで目元を抑えながらぎゃん泣きしている。その肩を抱くように支えながら、頭を下げているお姉さんとおばあちゃんに神妙な顔つきで言葉をかけている金田。蒸し暑い夏の晩にも関わらず、二人とも学校指定のブレザーを崩さずに着用していたけど、金田の髪はいつものようにお団子に結ってあった。

　野次馬のくせによくここまで辛気臭い態度を取れるな、と二人の情緒に関心していると、金田と目が合った。無視して帰ろうかと逡巡している間に、金田に話しかけられてしまった。

「おばさん、大変だったね。柏森さんもつらいでしょ」

「んー、うん」

　曖昧に受け答えしながら、つい藤本に視線を向けてしまった。傍から見たら、きっとこいつのほうがつらそうに見える。

「なんで、飛び降りなんてしちゃったんだろう」

　自分には何の非もない、と心の底から確信していないと出てこない言葉だ。私の神経を逆なでしておちょくっているのだろうか。

「理由はわかんないけど、近いうち死んじゃうかもなとは思ってたよ」

　会話をさっさと打ち切りたくて、つい本音を漏らしてしまうと、金田の瞳の中に明らかな嫌悪の色が広がった。お団子を引っこ抜いてやろうかと思った。

　お互い沈黙したまま金田とにらみ合っていると、式場の駐車場にサイレンを鳴らした救急車が入ってきた。たぶんおばさんを運ぶやつだろう。マヤには、もう必要ないし。

「邪魔にならないうちに帰ろうか」

　そう提案すると、じゃあねと短くを別れを告げて、金田は藤本に連れ添って式場を後にした。無理を言ってもう一度遺影を見せてもらおうかと少しだけ迷って、やっぱりやめて私も帰ることにした。同じように敷地を出ていこうとする人たちの背中を、救急車の灯火が騒々しく赤色に照らしていた。

　徒歩で帰宅する人の影が私のもの以外なくなったのを見計らって、煙草に火をつけた。

　地方都市の外れ、要するに田舎のコンビニでは、未成年が煙草を購入する敷居が低い。昼間はともかく、やる気ない大学生が眠たげに掃除をしているような深夜帯であれば、中学を上がってすぐの小娘一人でも、ほぼ間違いなく煙草を買える。

　我ながら品行方正とは言い難い私は、一年生のゴールデンウィーク明けにはすでに立派な重喫煙者になっていた。入学式の直後、鞄に入っていた妊娠検査薬を何かの弾みで教室の全員（自称進学校だからか、基本的にみんな躾がなっている）に見られたのがまずかった。以来、友達らしい友達が一人もできていない私は、いたたまれなくなったり、イライラしたりすると、校舎裏で喫煙するようになっていた。

　校舎裏は、校舎の陰になって丸一日陽が当たらず、そのわりに木の葉っぱはやたら散らばっているせいで、ぐちゃぐちゃな天然の腐葉土みたいになっていた。そんなだから、普段は誰も近寄らない。私と、マヤ以外は。

　最初のころは、よく通りがかる女子がいるなというくらいの印象しかなかった。リボンの色が私と同じ赤だったから、どうやら一年生であることくらいしか素性は知れない。煙を噴いている私の目の前を、まるで素知らぬ顔で通過していくマヤを見送ることが何度か続いてから、それがウサギ小屋への最短ルートであることに気づいた。よく通りがかる女の子から、ウサギが好きなちょっとかわいい女の子くらいには印象が具体的になった。それでも、相変わらずマヤは道に落ちている小石をそうするように私を素通りしていくし、私から声をかけることもなかった。関心というほどのものはなかったけど、煙草を吸っている不良のすぐ傍を通る時の、無関心を装おうとして逆に漏れ出す警戒の色みたいなものが、マヤからは全く感じられなかったのが少し気になった。

　一年次の夏休み前くらいのころ。そのときの昼休みも、私は煙草を吸っていた、。いつものようにマヤが通り過ぎてしばらく経ったあと、藤本と金田が二人セットで歩いていくのを見かけた。マヤ以外の人間がウサギ小屋に向かうのを初めて見たなとぼんやりしていると、ウサギ小屋の方から何か言い争うような声が聞こえてきた。状況からしてマヤと金田、藤本がトラブルを起こしているのは間違いなかった。仲裁してやろうとかは全く考えなかったけど、マヤがどんな顔で金田としばきあっているのかが気になって、遠巻きに様子を見に行くことにした。

　会話が聞こえるところまで来ると、私の期待した展開にはなっていないことがわかった。言い争いをしているというよりは、金田と藤本が一方的にマヤを詰っていた。

「もういいかな。この子、埋めてあげたいんだけど」

　ピクリとも動かない、おそらく死体のウサギを抱えたマヤが立ちあがった。ブラウスの胸元が血で汚れている。

「だめ。どうせ証拠を消そうとしてるんでしょ」

　金田はそう言うと、マヤを通せんぼするようにウサギ小屋の出入り口の前に立ちふさがった。

「目玉をくりぬくなんて、かわいそう」

　藤本は金田の隣でめそめそしている。いたずらにしては猟奇的だけど、泣くほどか。

「だから、わたしがやったんじゃないって。たぶん不審者かなにかだと思う」

「うそ。あなたが殺したんでしょ」

　困ったと言わんばかりに眼尻を下げたマヤを、金田が怒鳴りつける。そこまで言うなら証拠でもあるのかなと考えていたら、そのあとの金田の言葉に唖然としてしまった。

「部活でもいつもひとりで陰気な絵を描いてて、不気味だと思ってたの。やっぱり異常者だったんだね」

　――いやあ、さすがにそれはないだろ。そう思ったとたん、身体が自然に動いていた。煙草を一本取り出して、火をつける。それを口に咥えて、ウサギ小屋の出入り口のフェンス越しに、金田の背中に蹴りを入れた。金田は前のめりになり、ウサギ小屋の汚い床面に手と膝をついて、はっとしてこちらを振り向いた。藤本も泣くのをわすれて、目を見開いて私を見ていた。完全にビビってる。私はその反応に満足して、精一杯悪そうな顔をして言った。

「そのウサギ、私が殺した。なんかむしゃくしゃして、みたいな」

　言葉尻が全く締まらなかったけど、効果はてき面だった。一拍ほど茫然とした金田は、眉を吊り上げて立ち上がると、藤本の手を引いて、ウサギ小屋の扉を開けた。そのまま私を押しのけて十分な距離を取ったかと思うと、突然振り向いた。

「先生にいいつけてやる」

　甲高い声でそう喚くと、金田は藤本を連れたって校舎へ駆け戻っていく。小学生かよと内心で笑い転げながら、その背中に追い打ちを試みる。

「この学校の先生、みんな私を買ったことあるから無駄だよ」

　金田たちの走るペースが心なしか上がった。

「わはは。ざまあみろ」

　ひとしきり笑ってからマヤを見やる。ウサギを抱えたまま、きょとんとしている。

「一年生？」

　リボンを見ればわかるだろと思ったけど、困惑してるなら仕方ないかと思って頷いておいた。すると、マヤは急に思い出したように言った。

「あ、妊娠検査薬の人だよね」

「それやめてほしい。一応気にしてるから」

　ばつが悪くなり、地面で煙草の火を消した。ちょっと粋がりすぎたかなと反省する。

「学校の先生と売春してるってほんとう？」

　初対面なのに、遠慮のない奴だなと思った。

「うそだよ。でも私が言うと説得力あると思う」

　私がそっぽを向くと、「うん、信じちゃった」とマヤは小さく笑んでみせた。

　特にやることもなかったから、ウサギを埋めてあげるのに付き合った。とは言っても、私がやったことと言えば、用務員ご用達のシャベルを拝借してマヤに渡したくらいだ。あとは地面を掘っているマヤを、傍らで眺めているだけだった。そこまで手伝う義理もなかったし、ウサギの死体にもできれば触りたくなかった。結局口には出さなかったけど、私がいつも煙草を吸っている場所の近くに埋葬するのはちょっとやめてほしかった。

「さっきは、なんで助けてくれたの」

　地面にシャベルを突き立てながら、マヤが聞いてきた。ぐしゃぐしゃの地面は地中まで柔らかいらしく、マヤの細い腕でも障りなく掘ることができるようだった。

「あいつらがキモかったから」

　積極的に助けたというよりは、結果的に助けたことになっただけというニュアンスを伝えたかった。伝わっているかはともかく、マヤは黙って手を動かしながら先を促しているようだった。

「いつもウサギの世話をしてるの、きみでしょ。それを普段は何もしてないやつらがあんな風に言うのは、気持ち悪いと思った。それだけ」

　地面にぽっかりと空いた穴に、マヤはウサギの死体を優しく、大切な割れ物を扱うみたいにして横たえた。それから、掘った土をかけ戻していく。

「あなた、名前は」

　そういえば、お互い名乗っていなかった。毎日顔を見ていたから、なんだか昔からの知り合いのような気分に勝手になっていた。理由はないけど、下の名前だけ教えた。マヤも、マヤとだけ名乗った。

　ウサギの埋葬を終えるとマヤは顔を上げ、思いのほか人懐こい笑顔で私を見据えた。

「アヤコは良い人だね。助けてくれて、ありがとう」

　話を聞いてたのか疑いたくなるくらい何も伝わってなかったけど、そう言われてみると悪い気はしなかった。

「でもウサギを殺したのはわたしだよ」

　幼子のように弾んだ声で、マヤはあっさりとそう言い放った。

　金田の人を見る目は確かだった。マヤは、いつもひとりで陰気な絵を描いている不気味な異常者に相違ない。

　マヤと話すようになったときの、ウサギ小屋の思い出に浸りながら、肺いっぱいに吸い込んだ煙を吐き出す。マヤは異常だ。あのまま仲裁に入らなかったら、金田と藤本も殺していたんじゃないか。すると、私が助けたのはマヤじゃなくて金田たちの方ということになる。そう思うとなんだかおかしくて、私は夜道で一人笑い声をあげてしまった。

　私は笑った。マヤが死んでから、涙なんて一滴たりとも零していない。悲しくないわけじゃない。他に身近な人を亡くしたことがないから比較はできないけど、私は今、たぶん、それなりに悲しんでいる。それでも、涙が出ないのは。

　フィルターすれすれまで吸った煙草をアスファルトに投げ捨て、踏んで鎮火する。マヤは煙草のポイ捨てが嫌いだった。品性がないと言って怒るのだ。

「ウサギを殺すのは品があるの」

　そうからかうと、マヤはあれは探しものをする過程で仕方なかった、とおかしな弁明をした。何を探しているのかと聞いても、結局最後まで教えてくれなかったけど。確かにマヤは、いつも何かを探すようにきょろきょろと辺りを見回す癖があった。普段は深窓のお嬢様然とした落ち着きを払っているのだが、何かの拍子に首を捻っていたり、机や本棚の下を覗きこんだり、まるで小人や妖精を探し回る童話の少女のように、辺りを探りまわる。それと関係があるのかはわからないけど、好奇心も妙に旺盛だった。一緒に深夜のコンビニへ行ったとき、煙草を購入しようとする私を引き留めると、

「待って。わたしが買ってくる」

　なんでまたと訝しむと、煙草を購入するのは経験がないからとのことだった。一生経験しないほうがいいことだと思ったけど、任せてみることにした。これ買ってね、とマールボロボックス（好きな銘柄というわけじゃないけど、父親かなにかのお遣いだと店員に誤認させやすい）のパッケージを見せて、店の外で待つこと三分、マヤは見事マルボロメンソールを購入せしめた。

「いやいや、赤マルだよ。これメンソール」

　メンソは苦手なんだけどな、と内心で文句を言いながら一応受け取る。

「何が違うの」

「口がすーすーする」

　頭の上に疑問符でも浮かべそうな表情のマヤを、箱の角で小突いた。

「買うだけで、吸わなくていいの」

「うん。一回吸ったことあるからいいや」

　なるほど。吸ったことはあるけど買ったことはなかったのか、と納得しかけたけど、やっぱりよくわからんやつだと思った。メンソは相変わらず不味かった。

　マヤはいつだって、何か特別な瞬間を探しているみたいで、たまにそのせいで神経を病んでいるような素振りを見せる。

　ウサギ小屋の出来事から数か月、放課後はだいたい毎日二人で過ごす程度には親しくなったころ。午前の休み時間に校舎裏で煙草を吸っていると、マヤが突然やって来て、

「今日はこれからフケようよ」

　などと言いだすのだ。機を見て授業をサボる習慣が着いていた私と違って、マヤは学業に関しては、そこそこ真面目に取り組んでいたのに。

「フケるなんて言葉、どこで覚えてきたの」

　半笑いで話題を逸らそうとすると、マヤは眉根を寄せて、いいから行こうと私の腕を引っ張って無理やり立ちあがらせた。信じられない力だった。手に持っていた煙草の先が危うくマヤの身体に触れそうになる。

「おいどうした急に」

　マヤは答えずにずんずんと私の手を引いていく。仕方なく煙草を投げ捨てて踏みつける。マヤが普段なら目くじらを立てるところだが、お構いなしに校門へ進んでいく。

「鞄。鞄取ってくるから、ちょっと待ってて」

　校舎の正面へ来たあたりで、なんとか踏みとどまる。五、六人を相手に一人で綱引きでもさせられているような気分だった。マヤは眉間に皺を作ったまま、「校門で待ってる」と不承不承私に腕を離した。

　鞄を取って校門へ戻ると、一転してマヤはかなり上機嫌でにこにこしていた。

「いこう」

　半ば腕を絡めるようにして、マヤが私を引っ張る。先ほどと同一人物とは思えないほど、柔らかな力だった。ウサギの死体を、優しく抱えていたときみたいな。

　脳裏に浮かんだ胸糞の悪いイメージを振り払って、マヤに歩調を合わせる。

「行くって、どこに」

「うーん、いつもの喫茶店か、どこか散歩できるところ」

　それはたぶん、どっちもまずいことになるだろうな。

「制服のままだと補導されるでしょ。とりあえず私の家で着替えよう。近いからさ」

「アヤコの家、行っていいの」

「いいよ。なんもない普通の家だけど」

「行く」

　マヤはすこぶる楽しそうだった。お菓子の家かなにかを想像してるのではないかと心配になるほどに。

「ほんとうに普通の家だね」

　果たして、我が家へ到着したマヤの第一声である。余計なお世話だと、玄関を上がったマヤの、スカートの裾を捲りあげて抗議する。つくづく中身がおっさんだよねと軽くいなされてしまった。玄関に脱ぎ置かれたマヤのローファーの、几帳面に揃えられたつま先と踵が、なぜか記憶に残った。

「着替えたらさっさと出るよ。親が帰ってきたら面倒だし」

　自室のクローゼットから適当な服を見繕っている間、マヤは私のベッドに腰かけていた。初めて訪れた場所では、マヤはいつにもまして「さがしもの」をする傾向にある。私の部屋でもその性質は十全に発揮されていた。ちょっと恥ずかしかった。

「アヤコのご両親は、なんのお仕事をしてるの」

「ふたりとも税理士。結構裕福だから、煙草を買うためにお金抜いても気づかれない」

「兄弟は」

「いない。天涯孤独の一人っ子」

「参考書いっぱいだね。意外と勉強するんだ」

「素行以外は模範的な学生なんだよ」

　続く雑多な問いに、服を探しながら答える。へえとマヤの興味なさそうな反応をする。いつもこうだった。マヤはいろんなことを執拗に質問するくせに、答えを得たそばから関心の熱を急激に失う。まるで、答えは石くれで、問いそのものが貴重な宝石であるみたいに扱う。

　静かになったマヤにブラウスとワンピースのどちらが良いか聞こうと思って振り向くと、マヤは化粧台をじっと見つめていた。

「化粧したいの」

　そういえば、マヤが化粧してるところを見たことがないと思って、聞いてみた。

「やってみたい。アヤコがやって」

「できないの」

「うん。やったことない」

　今時珍しいとは思ったけど、相手がマヤだからか、不思議ではなかった。素でもそこそこ整っているから必要ないのかもしれない。

　化粧台に座るように促すと、マヤは素直に従った。

「最中はあんまりきょろきょろしないように」

「善処します」

　これは眼周りをやるときに気をつけないといけないだろうな、という私の予想に反して、下地からアイメイクまでの間は、マヤはおとなしくされるがままになっていた。

「それ、なに」

　マヤが口を開いたのは、チークを取り出したときだった。

「チーク。ほっぺにつけるやつ」

　説明しながら、マヤの頬骨の形を指先でなぞる。こそばゆそうにしているマヤに構わず、肌の張りと瑞々しさを指で貪っていると、くすぐったいよと苦情が入った。下調べは大事だから、といい加減な言い訳をして、チークを塗り始める。

「どんな色なの」

「ええと、エレガント・ウォーム・ローズだってさ。要するにピンクかな」

「ふうん」

　ふうんて。おたくの顔に塗ったくってるんだぞと言いたくなったけど、我慢した。マヤとのやり取りにもだいぶ慣れたところがある。

「最後はルージュでございます」

　口紅を手に取って、マヤの形の整った唇に触れる。マヤが何か喋ろうとしはじめたから、親指と人差し指で挟んで無理やり止める。小さな子どもみたいに、もごもごとなにか言わんとするマヤを、はいはいとあやす。大人しくなったのを見計らって、上唇と下唇のあいだに指を挿し込むようにして、わずかに開かせる。その際、わずかに口腔に侵入した指先にマヤの湿った体温が直接伝わってきた。

「マヤも、人間みたいにぬくいんだ」

「まるで人間じゃないみたいな言い方だね」

　私からすると宇宙人だよ、という言葉を呑み込んで、マヤの唇に紅を引く。目立たない色を選んだけど、マヤの人並み以上に白い肌にはよく映えた。そこに朱を差すのは、誰も足を踏み入れたことのない真っ白な雪原に、無遠慮に足跡を残していくような背徳があった。

「できたよ」

　ヘアバンドを外して前髪を整えてあげると、マヤは珍しい生き物でも見つけたみたいに鏡を覗きこんだ。我ながら良い出来だと思う。素材の味を活かしつつ、普段は潜在している魅力を引き出すことができたといったところ。

「ついでにピアスも空けとく？」

「それはお父さんとお母さんに聞いてからにしようかな」

「マヤの製造責任者だからね」

　不意にマヤが振り返った。首がもげてしまったらどうしようと思うくらいの急旋回だった。変なスイッチを入れてしまったらしい。

「妊娠検査薬、結果はどうだったの」

　そう尋ねるマヤの表情から、少女のあどけなさが一切失われているように見えたのは、化粧のせいなのだろうか。

「その話は、もういいじゃん」

　はぐらかそうとするや否や、マヤが椅子を蹴飛ばすように立ちあがったかと思うと、その勢いのまま、私は真後ろにあったベッドに押し倒されてしまった。凄まじい握力で両手首を押さえつけられる。

「婦女暴行はよくない」

「このベッドでセックスしたの」

　諭す私を無視して、マヤの指が手首に食い込んでいく。のんきなことに、私は自分の手首よりマヤの細い指のほうが心配になってしまった。

「ヤってたのは相手の家。うちには上げたことない」

「相手は年上」

「そうだね」

「今も会ってるの」

「もう交流はないかな」

　問いを重ねるごとに、マヤの顔が近づいてくる。鼻先が触れるくらいの近さで、マヤが一心に私の瞳を覗きこんでいる。マヤの虹彩に、私の目元がくっきりと映り込む。さっき自分の手で塗ったアイシャドウのラメが、快晴の星空みたいに鋭く煌いていた。

「妬いてんのかよ」

「ちがうよ。羨ましいの」

　マヤがそういうことに興味を持っているのが意外だった。縁もゆかりもなさそうだったから。例の探しものの一環なのかな、とも思った。

「見つかるといいね。さがしもの」

　拘束が緩んだ手を引き抜いて頭を撫でてやると、マヤは表情を弛緩させて私の胸元に顔を埋めた。

「見つける前にわたしがいなくなったら、アヤコが探して」

　鎖骨の辺りを、マヤの吐息がこそばゆく撫であげた。

「いやだよ。面倒くさい。見つけてからいなくなれ」

　アヤコは意地悪だなあ、とマヤは笑った。

「マヤが描いた絵を見せてほしい」

　通夜の翌日。そう言って頭を下げると、金田は藤本とのおしゃべりを中断してぎょっとしてたけど、渋々の体で承諾してくれた。不法侵入の必要がなくなったことを安堵する。

「見せるのはいいけど、なんで」

「さがしもの、かな」

　金田は全く腑に落ちないといった表情を浮かべたけど、美術室へはちゃんと案内してくれた。

　美術室に足を踏み入れるのは初めてだった。物は多いのに伽藍とした印象を与える室内に、微かに漂う有機剤の残り香が鼻腔を刺す。

「絵はそこにまとめてあるから」

　金田が示した一画には、確かにキャンバスやら額縁やらが、居場所なさげにまとめられていた。引っ越し前日の荷物みたいだと思った。

「マヤの絵は、これからどうなるの」

「親御さんに全部渡すみたい。だから昨日、みんなで整理してた」

　思い立ってからすぐに行動したのは正解だったらしい。

　キャンバスの一枚を両手で取って見てみる。アクリル画なのはわかったけど、何を描いているのかは、正直なところさっぱりだった。薄暗い緑と灰色の中間みたいな色の細長い長方形が、無秩序に天井から突き立って乱立しているのを、すこし高いところから俯瞰したような、現実離れした風景。

「抽象画ってやつなのかな。マジで陰気な絵だったんだ」

　つい漏らしてしまった感想を受けて、金田が表情を緩める。

「でしょ。でも、良い絵だと思う。悪い夢みたいな景色なのに、実際に見て模写してきたんじゃないかってくらい、色づかいが繊細で。わたし、ちょっと羨ましかった」

　そう話す金田の声音に、忌憚はなかったと思う。

「終わったら閉めといてね」

　用は済んだとばかりに美術室の鍵を投げ寄越して、教室へ戻っていこうとする金田を呼び止める。

「お通夜、来てくれてありがとう。藤本にも伝えといて」

　私が言うことでもない気がしたけど、口をついて感謝の言葉が出てしまった。金田はやっぱり怪訝そうにしていたけど、結局ひとつ頷いて美術室を出ていった。

　授業の予鈴が鳴ったけど、無視してさがしものに取り組むことにした。とは言い条、芸術の心得がからっきしな私にとって、マヤの作品たちは難解過ぎた。金田にもう少し解説してもらえばよかった。

　マヤの絵を一通り無心に眺めてみたものの、ぴんとくるものは一枚も見つからなかった。最初に手に取ったものと同じようなものばかり。マヤのことだから、探しているものをそのまま絵にかくような安直な真似はしないだろうなとは思っていたけど、ここまで手がかりがないとは。

　諦めて戻ろうかと机から腰を上げた拍子に、Ａ４に満たないくらいの、こじんまりとした鉛筆のスケッチがはらりと床に落ちてしまった。拾ってみると、ようやくああこれはという感慨が、少しの感傷を伴って胸に去来した。

　それは、二人で海を見に行ったときに、マヤが描いた海辺のスケッチだった。隅っこには、「トオク」というタイトルめいた走り書きが控えめに添えられていた。

　ベッドでしばらく天井を眺めていたけど、どうにも眠れそうにないから、近くの河川敷へ繰り出した。そのまま、海に出るまで河川敷に沿って歩くことにした。明け方までには海岸に着く。

　マヤが探していたもの。マヤが死んだ理由。察しはついてきたから、歩いている間にもう少し考えてみようと思う。たとえ答えが見つからなくても、海岸で朝焼けを見れば、なんとなくエモくなって、涙が出て、気持ちの踏ん切りがつく。きっとそうだと、自分に言い聞かて、私は夜の道を歩き出した。明日にはマヤは灰になっているんだな、と不意に思った。

　季節が夏で良かった。まばらな建物と雑木林の間をほのかに吹き抜ける向かい風は、火照りつつあった身体を適度に冷ましてくれる程度に涼しい。長距離の深夜徘徊にはぴったりの天候だろう。しばらく歩けば、風に潮の匂いが混ざってくるはずだ。

　ほぼ一年前の初秋、授業を勝手に切り上げてマヤと海に行った日も、天気はよく晴れていた。ちょっと過剰なほど青い秋晴れの空に、インクを水に溶かしたみたいに曖昧な雲がときどき浮かんでいる。私とマヤは、河川沿いを海まで走るバスに乗っていた。

　乗車してすぐは車窓を流れていく景色や運転手の後ろ姿をつぶさに観察していたマヤは、それらの関心をすっかり失って、今は年寄りみたいに茫洋として空を見ている。絵心がない私でも水彩画にしたくなるくらい、青空とマヤの彩りは淡かった。自分が着ているシャツのワインレッドが場違いな気がしてくる。

「絵になるね。病気の療養に赴く薄幸の美少女って感じ」

　肩口に垂らしたおさげの一房を摘まみながら、マヤが振り向く。不健全に蠱惑的な所作だった。

「それって褒めてるの」

「あんまり」

　素っ気なさを装って返すと、マヤはどことなく気だるげに、空を眺める姿勢に戻った。

　さしたる会話もないままバスに揺られること一時間弱、私たちは海岸沿いの漁港に降り立った。もう仕事のコアタイムは過ぎたのか、地元の漁師たちの姿はどこにも見えない。

「プライベートビーチだ」

　港のアスファルトを踏んだ途端に上機嫌になったマヤの、満面の笑み。

「平日の昼だからね。フケた甲斐があったよ」

　心なしか足取りも軽いマヤの、半歩後ろに続いて歩き出す。マヤの腕にはスケッチブックが抱えられていた。海を描くのと聞いてみると、マヤは振り向いて後ろ歩きになった。とろくさいくせに器用なことをしようとするから、マヤはよく転ぶ。

「うん。陽が沈むところを描きたい」

　そのときは、また間の抜けたことを言い出したな、というくらいにしか思わなかった。

「ここ太平洋側だから陽は沈まないんだけど」

　驚いたときの猫みたいに目を見張って、マヤが急停止した。あんまりの急ブレーキだったから私もつんのめりそうになったけど、踏みとどまっている場合でもなかった。止まった拍子に躓いたのか、マヤが背中から転びそうになったからだ。

「あぶ」

　「ない」まで言い切る前に、片足を大股で踏み出す。まろびゆくマヤの腕を取って、もう片手を腰に回し、膝を軽く曲げて体重を受け止める。なんとか倒れる前にマヤを抱えることができた。頭打ったらやばかったぞ、と思いがけず鋭い声が出た。

　瞳孔がやや開いたマヤの両目が、真っすぐに私を見上げる。

「頭を打ったら、わたし、どうなってたかな」

　マヤの腕が、私の首の後ろに回される。

「死んだんじゃない。頭が割れて、中身が出ちゃって」

　少しむっとして、きついことを言ってしまった。マヤの顔が間近にあるのがきまり悪くなって、引き起こしてから一歩下がった。

　何度か瞬きをするくらいの間を黙って見つめ合っていると、やがてマヤは何事もなかったように、ぐるりと首を回して辺りを見渡した。

「あの山に行きたい。海を描くのはそのあと」

　マヤが指さしたのは、山というよりは小高く隆起した森林と言った方が正確なくらいの小山だった。せっかく海に来たのにと言おうか迷って、やめた。積極的に拒否する理由は、虫よけを用意していないことくらいだった。

　小山の麓まで来ると、取ってつけたような散歩コースの案内板を見つけた。明らかに素人仕事な読みづらい図だったけど、二通りのルートがあるということは読み取れた。

「昔はリス園があったんだって。残念だね」

　マヤが看板の片隅を指して言った。

「目玉をくり抜けなくてか」

　リスのは別にいいよ、とマヤはころころ笑った。

「別々の道で行ってみよう。途中で合流するみたいだから」

「マヤは迷いそうだからだめ」

　さっきの転倒未遂を思い返すと、どう考えても危なっかしいから、にべもなく突っぱねる。

「大丈夫だよ。もう転ばないようにするし」

　転ぼうとして転ぶやつなんてそうはいないだろ、と言おうとしてやめる。マヤなら転ぼうと決めて転んだりしてもおかしくない気がしたし、なにより子どものお守りをしてるみたいで嫌になった。

　合流する時間やら何かあったら連絡することやら、簡単に取り決めをして、小山に踏み入ってすぐの分岐路でわかれた。煙草に着火しながら、緑に分け入っていくマヤに手を振る。

　山道は、入ってすぐこそよく整備されていたものの、登り進めるごとに人の手が加わった跡がみるみる減っていくのがよくわかった。次第に段差すらなくなり、ついにはほとんど獣道と言っていいくらいになってしまった。木々の陰でぬかるんだ土を踏んで、思わず悪態をつきそうになる。深呼吸でもしようと思って上を見上げてみると、枝葉の隙間から零れる太陽の光が千々と降り注いでいた。別の道を行ったマヤのことが気になって、嫌になる。私まで吊られて神経を病んだような気分になった。

　マヤがどこか別のところに行ってしまっていなければだけど、合流地点には私の方が先に到着したようだった。携帯を確認しても連絡はない。

　手頃な岩に腰を下ろして、煙草を取り出す。チェ・ゲバラは、葉巻を咥えて森林の中での虻避けにしてたんだっけか、などと益体のないことを思い出しながら煙をくゆらせていると、私が通ってこなかったほうの道からマヤが歩いてくるのが見えた。さっきまで気にもとめなかったけど、私が通った方にも増して険しい道だった。人が一人通るのがやっとの悪路が、マヤの身長を超える高さの藪の間を縫うようにこちらまで伸びている。

「おつかれさーん」

　手を振りながら呼びかけてみたけど、マヤは油断なく辺りをきょろきょろと見まわすのをやめない。様子がおかしかった。三十メートルあるかないかくらいの距離なのに、私の姿がまるで見えていないみたいだった。

「おーい」

　もう一度呼びかける。そこでマヤは、ついに歩みすら止めて辺りを見回し始めた。

「どこにいるの」

　叫び返されてようやく気づいた。周りの木々で音が反響している。それにしたって、私のことは見えているはずなのに。

　迎えに行こうと思って足を踏み出したときだった。マヤのすぐ脇の藪で、何かが動いた。マヤの耳には、がさりという葉音が間近に聞こえたのだろう。それを追うようにして、マヤは躊躇なく茂みの中へ入っていって姿が見えなくなった。舌打ちをして走り出す。やっぱり離れるべきじゃなかった。

　マヤを追って茂みの中へ分け入る。硬い葉の先端が身体中に刺さった。引っかかったものを無理やり引きはがしたら、リネン地のシャツに穴が開いた。最悪の気分だったけど、絶えずマヤの名前を呼び続ける。奥へ進めば進むほど深緑は密度を増していくようで、徐々に方向感覚が消失していく。ちゃんとマヤを追えているのかすら定かじゃない。脳内の酸素が不足していくのがわかる。マヤ、マヤ、と夢中で呼び続けているせいで、マヤの神経病の内側に取り込まれて、もがいているような錯覚があった。

　突き出した手の先に、葉の感触がなくなったかと思うと、急に視界が開けた。藪と木々との縄張り争いの緩衝地帯みたいな空間に、マヤは蹲っていた。息も切れ切れに、そばへ歩み寄る。蹴り転がすか、頭を撫でてやるか、という極端な二択が浮かんで、後者を選んだ。

「アヤコ、そこにいるの」

　マヤが顔を上げた。いるよと応じて、両手でマヤの顔を掴み、目線を無理やり合わせる。焦点が定まっていなかった視線が、次第に私に収束していく。私のなかで、漠とした苛立ちの波がさざめいた。蹴りを入れるよりはマシだろうと思って、わずかに開いて呼気を漏らすマヤの唇に、自分の唇をぶつける。マヤの唇は受け入れるでも拒むでもなく、私に食まれるがままにしていた。唇の輪郭ごと口腔に溢れるマヤの体温を貪る。呼吸を妨害するため、喉を塞ぐようなつもりで深く舌を突きいれる。

　どのくらいそのままにしていたのだろう。苦し気にもがくマヤの爪先が、私のうなじをひっかいてようやく、口を離すことができた。酸素を求めてだらしなく開いた口から、どちらのものとも知れぬ唾液が糸を引いて落ちる。

「キスはしたことなかったな」

　陶然とした顔でマヤは言った。二人の世界が溶けて混ざったような、不快すれすれの高揚が、私とマヤの間に広がっていた。

　それから一年経たないうちに、マヤは何でもない市街の陸橋で、頭から飛び降りて死んだ。

　潮風に頬を撫でられて、眠気が遠のいていく。港が見えてくるころには、地平線は白みつつあった。瑠璃色を浅くしていく空の下限を目指して、私は歩を速める。美術室から持ち出した海のスケッチが、手の中でかさかさと音を立てた。

　歩き始めたときは朧げだった答えが、私のなかで確信になっていた。もう本人の口から聞くことはできないけれど。

　マルボロの箱。

　化粧。

　ウサギの眼。

　思い返してみれば、どうして気づけなかったのか不思議なくらい、マヤは自分のさがしものを私にさらけ出していた。私も、マヤも、なんて間抜けだったのだろう。おかしくて噴き出しそうになる。そんなものを探すために、ウサギの目玉をくりぬいたり、高いところから飛び降りたりしたのかよと。

　ベッドの上で羨ましいと言ったのは、私自身じゃなくて、私が見ているものだった。マヤが描く絵画の独特な色づかいは、芸術性の発露じゃなくて、単に見えたものを見えたまま描こうとした結果だった。

　死ぬ前に何も言ってくれなかったことだけが、少しだけ悲しかった。きっと、私は止めなかっただろうに。

　マヤの中身は、ちゃんと赤かったのだろうか。

　マヤの眼に映ったはずの、上下も色彩もサカサマになった都市の姿を幻視する。それは、美術室で見た絵画たちに酷く似ていて、全然似ていなかった。

　太陽の先端が地平線に顔を出したの見計らって、トオクに火を点ける。不完全燃焼の緋色が、色のない海の景色を侵していく。ひと際強く吹いた潮風が、朝焼けの中に燃えかすと灰を巻き上げていった。その赤い瞬間が、時間や空間じゃないものにかき消されて見えなくなっていくのを、私はいつまでも見送った。

　どうか、すべてが赤く見えますように。